

(4) 課題研究の評価の妥当性に関する考察

課題研究の評価に関しては、生徒自身による自己評価と我々教員による観点別評価を学期毎に実施している。(他にも生徒間での相互評価である他己評価を、発表会の際などに不定期で実施している。)生徒には「自己評価シート」(P.89を参照)を事前に配付し、直接記入させた上で各学期末に提出させた。一方教員は、ループリック(P.84を参照)に基づき、サーバー上の入力シート(エクセルファイル)に直接生徒評価を入力していった。記入及び入力に際しては、生徒・教員共にA、B、Cの3段階の基準で評価を行った。上記表1・表2中の数値は、A:4点、B:2点、C:1点として換算した数値を、項目毎に平均値をとったものである。例えば、全項目がC評価の場合の換算値は最低値となる1.00を、全項目がAの評価の場合の換算値は最高値となる4.00の値をとることになる。なお、未入力項目がある生徒のデータは予め省いた上で集計を行った。また、現在(2月)は、学年末の最終評価がまだ入力されていない段階であるため、ここでの考察は第2学期までの評価に基づいて行うものとする。

表1

令和2年度	生徒の自己評価					教員の評価			総合評価	総合評価
第2学期	(1) 研究 ノート	(2) 課題 発見力	(3) 知識習得 活用力	(4) 論理的 思考力	(5) 見通しを 立てる力	学びに 向かう力 人間性	思考力 判断力 表現力	知識 及び 技能	生徒評価 5項目の 平均値	教員評価 3項目の 平均値
全生徒	2.58	2.61	2.47	2.15	2.42	2.61	2.22	2.33	2.45	2.39

表2

令和3年度	生徒の自己評価					教員の評価			総合評価	総合評価
第2学期	(1) 研究 ノート	(2) 仲間との 協働姿勢	(3) 知識習得 活用力	(4) 論理的 思考力	(5) 見通しを 立てる力	学びに 向かう力 人間性	思考力 判断力 表現力	知識 及び 技能	生徒評価 5項目の 平均値	教員評価 3項目の 平均値
全生徒	2.72	3.15	2.55	2.51	2.64	2.74	2.40	2.30	2.71	2.48

表1は令和2年度の生徒(現在の第3学年)のデータで、表2が令和3年度、即ち今年の生徒のものである。比較しやすいよう、双方とも第2学期の集計結果を示している。まず目に付くことは、殆どの項目に関して昨年よりも今年の評価値の方が高いことである。一部評価項目が異なるところ(生徒の自己評価の(2)の項目)はあるが、平均値を比べてみても、生徒・教員ともに昨年よりも上がっている。これは、課題研究の進み具合によるところが大きいものとする。昨年度は新型コロナウイルス感染症の影響で、休校や分散登校の期間が長くあり、第2学期末の段階では中間発表までに至っていなかった。一方、今年度は短期の休校期間等があったものの、昨年よりは順調に課題研究を進めることができおり、第2学期中に中間発表会を催すことができた。そのため、生徒の達成感が上がり、肯定的な評価につながったものとする。また、評価項目が違うので単純には比較できないが、第1学期よりも第2学期、第2学期よりも第3学期(昨年)と、学期進行に伴って評価値は高まっていった。この傾向も生徒の方が顕著であった。(教員ではさほど有意味な差は見られなかった。)

昨年の分析では、生徒の自己評価と教員の評価を比較すると、総合評価において緩やかな相関が見られたが、今年は少し事情が異なっている。本来は、生徒の自己評価と教員の評価には一定の相関があることが望ましいが、実際にはかなり齟齬があった。例えば、教員評価が高い(全項目がA評価)生徒の中に、自己評価が低い(C評価の項目が複数ある)生徒がいたり、逆に、教員評価が低い(C評価の項目が複数ある)生徒の中に、自己評価

が高い（全項目が A 評価）生徒がいたりした。試しに、全項目が A 評価の生徒の教員評価を見てみると、その平均値は **2.71** であった。次に、1つだけ B 評価で残りの項目はすべて A 評価の生徒の教員評価の平均値を算出すると、**2.87** と、逆に上がっていた。昨年も指摘したことだが、オール A 評価を標榜する生徒の中には、かなり適当に、もしくは偽って評価を記入している生徒が存在する可能性がある。このことは評価の妥当性に疑念を抱かせるものであり、評価の目的についてもっと生徒に伝える必要性を感じる。

続いて、生徒の自己評価項目（5 項目）を比較すると、「論理的思考力」の項目が昨年と比べてかなり評価値の上昇が見られた。次に、「見通しを立てる力」の項目も昨年よりも評価値が伸びていた。昨年はテーマ選定で右往左往して先に進めず、なかなか課題設定まで辿り着けない生徒も多かったが、今年は指導方法の改善やワークシートの改訂もあって、より早い段階から課題研究に取り組むことができた。その結果が、この 2 項目の評価値の上昇に繋がったのではないかと考える。また、最も評価値が高かったのは、昨年は無かった「仲間との協働姿勢」の項目であった。この **3.15** という評価値は、およそ 60% の生徒が A 評価を付けたことを表している。このことは、中間発表会の開催にあたって、生徒自身が協働作業に積極的に関わったことが大きく影響しているものと考えられる。発表者や司会、聴衆としての質疑など、それぞれが自分の役割を果たすことによって発表会を成功に導いたことが評価されたものだと思う。

一方、教員の評価項目（3 項目）を比較すると、「学びに向かう力・人間性」の項目の数値が昨年と同様最も高く、次いで「思考力・判断力・表現力」の項目、最後が「知識及び技能」の項目の順であった。数値の上昇率で比較すると、「思考力・判断力・表現力」の項目が最も上がっており、次いで「学びに向かう力・人間性」の項目が高まっていた。逆に、「知識及び技能」の項目は若干ではあるが数値の減少が見られた。教員の側にも、昨年よりは課題研究の進捗状況が改善されたという認識が共有された結果かと思う。これらの教員評価は、相対的に B 評価が主流を占めることが前提であるが、数値を見る限りほとんどの生徒が概ね満足できるレベルに到達していたものと考ええる。

生徒の自己評価と教員の評価を個別の項目毎に比較してみると、「仲間との協働姿勢」の項目の自己評価が高い生徒に関して、その教員評価は必ずしも高くないという傾向が見られた。一方で、「研究ノート」の項目の自己評価が高い生徒に対する教員評価は比較的高い傾向にあったが、これは昨年と同様の結果であった。研究ノートは定期的に提出させたり、授業中に個別に面談をしたりしながら常に内容の点検を行っていた。そういった意味では客観的な評価がしやすい項目であったと言える。しかしながら、「仲間との協働姿勢」の評価に関しては、生徒の主観と教員の主観との間にはかなりの開きがあったものと思われる。特に、普段の取り組みが不十分であるにも関わらず、この項目だけに高い評価を付けている生徒に対しては、教員評価が厳しめになったものと思われる。

最後に、評価の妥当性に関して考察する。昨年とほぼ同時期・同内容の評価方法であったことから考えると、課題研究の進展に応じて評価値の上昇が見られたことは、この評価の妥当性を支持しているものと受け止めている。しかしながら、生徒の自己評価と教員の評価との間にいくつかの乖離が見られたことは、今後の課題として捉えている。教員は昨年同様のルーブリックに則って評価を行っているが、個々の教員間で評価のバラツキが依然としてあった。評価に当たっては、教員間の共通理解が得られるような工夫が必要である。例えば、講座内の複数教員で相互に意見交換を行った上でそれを評価に反映させる工夫や、提出課題や取り組み内容に予め共通の評価規準を設定しておくなどの方法である。一方、生徒の自己評価に関しても、自らの取り組みを客観的に見つめさせ、もう少し慎重に回答するよう指導する必要がある。今後も、生徒の探究心の向上や研究能力の深化に還元し得る評価方法を構築していきたいと考える。